

執着のスタイルについて

荒 井 真 太 郎

The Style of Adherence

ARAI Shintaro

はじめに

一般的に「強迫」という言葉が否定的なニュアンスで使われるのと対照的に、「執着」という言葉は、良い意味でも悪い意味でも使われる。執着とはもともと仏教の經典の翻訳にあたって作られた訳語であり、そのため心が物事に固くとらわれたり、深く思い込んでなかなか離れられないなどのネガティブなニュアンスがある。

しかし、執着することをやめて簡単に諦めてしまうのでは、生きてゆく上で遭遇する様々で困難な課題を克服することはできないし、例えば、自分の仕事にこだわりを持ったり、自分で決めたことに執着することなどは、アイデンティティーの保持に強く関わっている。これは、執着の肯定的な側面を表している。

筆者は、執着という概念が、肯定的、否定的の両方のニュアンスを併せ持つ点に着目し、その意味を考えることでパーソナリティの理解に役立つところがあると考えた。そこで本稿では、執着するということと、執着しないということがどのような人格機能に関わるのかということを中心に心理学的に検討するものである。

問 題

① 執着の概念

下田(1941)が、躁鬱病の病前性格を言い表すために「執着性格」という言葉を用いたことはよく知られている。もともと下田は、「執着」ではなく、「偏執」という語を用いていたが、「偏執」という言葉が *paranoisch* という意味と混同されやすいために、「執着」という言葉を使用するようになったのである。しかし、執着という言葉にはそのものとしての深みがあり、また外国の心理学用語の翻訳ではなく、日本において使用され始めた概念である点からも、内外の研究者によって評価されている。

執着性格の特徴として「仕事に熱心、凝り性、徹底的、正直、几帳面、強い正義感や義務責任感、ごまかしやずぼらができない」などが挙げられている。下田は、それらの本質的特徴は感情の経過の異常であると述べている。この性格者にとっては、一度起こった感情が正常人のように

時とともに冷却することがなく長くその強度を持続するか、むしろ増強する傾向をもつというのである。平沢(1966)は、執着性格の概念を再吟味して、その本質を感情興奮性の異常というよりも、意志・行動の点から考えるべきであろうと述べている。確かに、上記の執着性格の特徴はどれもある種の行動の傾向を指しているものであり、感情の特異性を直接言い表したのではない。

「仕事に熱心、凝り性、徹底的、正直、几帳面、強い正義感や義務責任感、ごまかしやずばらがない」などの執着性格の特徴は、それぞれ社会適応的に望ましい特性が多い。つまり、これらは社会に適応するためのコミットメントの高さという次元が関わっていると考えられる。しかし、それらの特性は社会適応的に働くが、同時に過活動によって自己のコントロールを失ってしまう可能性を含んでいる。これは、強迫性に関わる問題であると考えられる。

このように、本稿において執着の問題を考える時、コミットメントの高さと強迫性の2つの次元に着目してみたい。これらは、丁度、執着のポジティブな側面とネガティブな側面に対応している。

② 執着の背景としての強迫性について

笠原(1976)は、「強迫性格スペクトル」という一連の相互に移行的に関連しあう性格学的系列の中に執着性格を位置づけている。すなわち、メランコリー親和型性格(Tellenbach, 1961)や森田神経質のような執着性格に類似した性格類型もこの強迫性格スペクトルの中でそれぞれの位置を占めており、それらの性格類型は強迫性を基盤に持っているという点で共通しているというものである。

笠原は、そこで述べる強迫性の意味について次のようにまとめている。つまり、「①人生における不確実性、予測不可能性、曖昧性を極小に抑えるための単純にして明快な生活信条ないし、生活様式の設定。②それによって整然たる世界を構成しようとする空想的万能感。③予測不能性をあらかじめ排除するための何らかの形での呪術の利用。④不確実性の高い生活領域への不参加とそれによる生活領域の狭隘化」である。Salzman(1968)によれば、強迫的な心理防衛は、普遍的、一般的であって、全ての人間の活動の社会機能の中にある程度関与しているものである。それは、人間に本質的な無力さ、頼りなさに対処するための、自分自身の肉体へのコントロールと、自分の周りの物理的世界へのコントロールをしようとする(想像上のものとはいえ)一つの試みというのである。

執着性格者の仕事に熱心、几帳面さ、凝り性、ごまかしやずばらがないなどは、このような強迫性を背景にしていると考えられることができる。コミットメントの高さが社会適応的な方向に働いても、それが強迫性を背景としているかぎり、不確実性や曖昧性を排除することの方が重要な目的になってしまい、生活領域の狭隘化を招く可能性を孕んでいる。それはもはや創造的な活動とは関わりのないものであり、当人を徒に疲労困憊させるだけになるかもしれない。

③ 執着と逃避・退却の問題

執着すること、執着しないことの心理的な意味を考えるにあたり、次に述べる一連の精神病理学的な研究についてここで触れてみたい。笠原・木村のうつ状態に関する分類(1975)では、執

着性格はI型の内因性単極うつ病の病前性格として記載されている。広瀬は、その内因性単極うつ病が、逃避型抑うつ（広瀬，1977，1986）や退却神経症（笠原，1978）と、病因や臨床的位置づけにおいて密接に関連しているということを指摘している。広瀬はそれらの3類型について、「競争社会の闘いにおいて、闘いの前から無気力になるのがアパシー型神経症、闘いに参加しながら形成不利と見るや簡単に闘いを諦め抑うつに逃避する逃避型抑うつ、最後まで闘いながら抑うつに陥るメランコリー親和型のうつ病」というように競争社会をめぐって生じる病態という捉え方をしている。また、佐藤（1986，1987）は、同じくその3類型を比較検討した研究を行っており、これらの3病態が強迫性という共通の基底をもとにして表れた異なった表現型であるという見方をしている。本稿では、逃避型抑うつや退却（アパシー型）神経症に共通する特徴を問題とし、それを執着することと対比して捉えてみたい。

典型的な内因性うつ病が、全般的な抑制を示すのに対し、逃避型抑うつや退却神経症に特徴的なのは、本業である仕事や勉強に対して限局的に意欲を失うが、本業とは関係のない活動に関しては比較的活発であることがある点である。また、広瀬によれば、逃避型抑うつや退却神経症の場合、従来の神経症やうつ病には必ずあるとされていた耐え難い不安、焦燥、抑うつ、葛藤など主観的苦痛の体験を必ずしも前景に持たず、内的空虚感や、無力感、敗北感が認められるとされている。

本業とは、アイデンティティーの中核に関わるもので、うつ病者のようにそれに執着したりこだわりを持つことは従来の常識的な態度である。ところが、広瀬の言うように、逃避型抑うつや退却神経症の場合、本業に対する諦めが早かったり、コミットする以前に無気力状態に陥ってしまうところがある。

執着するということには、仕事などに熱心に取り組むというように、社会適応的に望ましいコミットメントの高さという次元と、ごまかすことができない、仕事のことが気になって仕方が無いなどの、強迫性の次元が含まれるということは前に述べたが、一方、逃避や退却ということには、大事なことにコミットせずに回避的であるという次元や、意欲が湧かない、無気力になるなど自己の活動を起こすことが出来ないという次元が含まれている。本稿では、それらを執着的態度と逃避・退却的態度として、それぞれを対照的な関係にあるものとして捉えてみたい。

内因性単極うつ病、逃避型抑うつ、退却神経症を比較した上記の精神病理学的研究によって、それぞれの類型が強迫性という共通の背景を持っていることが指摘されているが、逃避や退却という態度は、執着することと、一見正反対の態度である。このことをどう考えればよいのだろうか。

酒井（1987）は、うつ病者が物事に取り組む時の頑張り方は、どこか度外れなところがあり、彼らの意識には「やればできる」というように、行為することによって自分の願望がかなえられるという全能感がある、と指摘している。彼らの特徴である、几帳面、仕事熱心、熱中性、凝り性、徹底性などの本稿でいう執着的態度は、その全能感の表れであるというのである。

酒井によると、行為の全能とは、幼児や強迫神経症者がある願望を考えただけでそれが現実となって起こると考えてしまう「思考の全能」（Freud，1909）に対比させて述べたものである。Freudは思考の全能を「現実に対する心的現象の過大評価」あるいは「心的行為が外界の変化に及ぼしうる影響の過大評価」と定義している。このような全能感とは、Ferencziの言う現実感の

発達とともにしだいに制限されてゆく過程（①無条件的全能感の段階、②魔術的・幻覚的全能感の段階、③魔術的身振りの助けによる全能感の段階、④魔術的思考と魔術的言語の段階）の中に位置づけられるが、酒井は、うつ病者にはこのような幼児的全能感が残っていると考えており、全能感の破綻をうつ病の発病や再発の一因として重視している。前述の逃避・退却的態度も、この全能感の破綻と言える事態として捉えることができるように思われる。

抱いている願望が自分の思い通りに満たされるという空想的全能感の延長線上に、強迫性の特徴であるところの不確実性を排除して整然とした世界を構成し得るという全能感があり、これらが執着的態度や逃避・退却的態度の背景にあると本稿では考えるものである。

Ferenczi が、現実感との関わりにおいて全能感を乳幼児期の正常な発達段階の中に位置づけたように、自分の願望が思い通りに実現されるという全能感を持つことは発達してゆく上で必要なものである。またそれは、世界を自分がコントロールできるという全能感についても同様であると言える。しかし、実現がどのようにしても不可能であるような願望を持つことはしばしばであり、そのような時に願望と現実とは別物であるからといって、全く切り離してしまうことは適応的ではない。これは、逃避的・退却的な態度に繋がるだろう。また、自分の願望が完全に満たされるように頑張ることは、際限のない試みであり、これは執着的な態度に繋がるものと思われる。

Winnicott (1971) は、現実と幻想の境界領域というものを考え、幼児の自我の成立にとってこの領域が非常に重要であると述べている。Winnicott によれば、幼児の遊びこそがその境界領域での活動を示すものである。願望が幻想の領域に属するもので、そのままでは現実には持ち込めない場合に、現実と幻想の境界領域が重要になってくる。そして、そのような境界領域で遊ぶことを通して、願望と現実の折り合いを付けるということが可能になってくることを Winnicott は言っているものと思われる。この折り合いが付けられないと、現実を自分の願望通りにするために頑張り続けるか、或いは願望が実現することはあり得ない、というように願望と現実を切り離してしまう態度が生じてくるであろう。「現実と幻想の境界」や「遊び」ということは、曖昧で客観的な定義の難しい問題である。しかし、それらは、執着や逃避・退却の問題に対する一つの答えとして重要な意味を持っているものと思われる。

以上のように執着の問題は、自己の願望を現実の世界の中で実現させようとする際の、願望と現実の折り合いの付け方という人格機能の一側面に関わっていると考えられる。そこで、本稿では仮説として、執着的態度とは、願望を実現させようと頑張るあり方であり、逆に逃避・退却的態度とは、願望と現実を切り離してしまうあり方であると考えられる。前者においては、願望と現実が一致するようなイメージを持ちやすいであろうが、後者の場合には両者を別次元のものとして切り離そうとするイメージを持ちやすいであろう。

以下の調査においては執着スタイルについて測定するための尺度を作成し、上記の仮説についての検証を試みる。

方 法

① 執着スタイル質問紙の作成

1. 被調査者；近畿圏の大学・専門学校の学生および、社会人、主婦等の530名。内訳は、男

性 333名、女性 197名。平均年齢は 24.2才（標準偏差8.79）年齢範囲18～57才。

大学生に関しては、大学の講義の時間を利用して配布、回答してもらったものと、郵送にて依頼、回答してもらったものが含まれる。

社会人等については、京都大学の卒業生名簿より、ランダムに選択し、郵送により依頼したものと、筆者が個人的に依頼、配布したものが含まれる。

2. 材料；執着スタイルを測定するための尺度を筆者が作成した。予備調査の後、質問項目が次の4次元を念頭に置きつつ選定された。すなわち、執着的態度のうち、①コミットメントの高さの次元に関する項目（12項目）、②強迫性次元に関わる項目（12項目）。また、逃避・退却的態度のうち、③コミットメントを意識的に回避しようとする態度を表す次元に関わる項目（14項目）、④無気力など自分の活動を起こすことができないことを表す次元に関わる項目（12項目）、である。それぞれは、「全くそうである」～「全くそうでない」の5件法により評定された。

②執着スタイルの意味についての検討

1. 被調査者；近畿圏の大学生・専門学校の学生、および社会人、主婦等の140名。内訳は、男性 92名、女性 48名。平均年齢は 21.9才（標準偏差4.45）、年齢範囲18～37歳。被調査者は、①と同様に、郵送にて個人的に回答を依頼したものと、大学の講義時間の一部を利用して集団法によって回答してもらったものが含まれる。

2. 材料；(1)①で作成された執着スタイル質問紙

(2)「自分」を登場させるTAT物語；Murray版TAT図版の1図版、2図版、6BM図版の3枚の図版について、物語の創作を求めた。TAT図版をB4の白紙にコピーして、空欄に各自で物語を記入してもらう方式で施行した。「絵を見て、思い浮かぶ物語を作ってください。登場人物が何を感じ、どうしているのか、この絵の前に何があって、この後どうなるのか、などを書いてください」という通常の指示に加えて、「それぞれの話の中に、自分自身を何らかの形で登場させてください」という条件を強調した。（注；このような条件を加えたのは、次の理由による。つまり、現実のアイデンティティーを担った存在である自分を物語という空想の世界に組み入れるには、現実と空想の境界を無くしてしまわなければならないが、その課題をどうこなすかということにおいて、全能的に自分を物語の中で活躍させるか、あるいは自分を物語の中で活躍させることに抵抗を感じるかということが明らかになり、それによって願望と現実の折り合いの付け方が表現されることが期待できるのである。）

図版の選択については、被調査者のコンプレックスを強く刺激したり、抵抗が生じる可能性が少ないものであること、基本的TATセット（Hartman, 1970）に含まれるような、一般的に使用でき、生産的であり人格理解のために有用であると多くの臨床家が認める図版であること、男性、女性に関わらず絵の人物に同一視したり、絵の人物と関わりを持ちつつ登場しやすい図版であることを考慮して選択された。

3. TAT物語の整理・分類

執着のスタイルとの関連を検討するため、TAT物語の中に「自分」がどのような形で登場し、物語の展開に対してどのような役割を果たすかという点に着目し、以下のような指標によりそれぞれの物語を分類した。

(i) 自分を図版の人物などに同一視して、登場する場合。1図版であれば「自分はバイオリンを前にして座っている少年で〜。」というような登場の仕方である。

(ii) 自分が第3者として登場し、物語の展開に積極的な役割を果たす場合。また、1図版を例にすると、「自分が、バイオリンをうまく弾けなくて悩んでいる少年を慰める」というような役割でもって登場する場合である。

(iii) (i)や(ii)の場合を合わせて、「自分が物語の中で中心的、積極的な役割を担う場合」として、その物語がポジティブな内容である場合とネガティブな内容である場合を区別した。従って、そのポジティブな内容の物語の場合とネガティブな内容の物語の場合のそれぞれを指標とした。

(iv) 図版から何らかの物語を作っても、自分を全く登場させない場合。

結果および考察

①執着スタイル質問紙の因子分析

執着スタイル質問紙の50項目について「全くそうである」から「全くそうでない」の回答に対して5点～1点の得点を与え、全項目について主因子法——Varimax回転により因子分析を行い、4因子を抽出した。どの因子にも0.3以上負荷しなかった項目と複数の因子にわたって高い因子負荷量を示した項目を省いた後、さらに各因子ごとに上位—下位分析を行い、1%水準で群間差の見られなかった項目を除外したところ、表1の39項目が選択された。また、各因子についての信頼性を検討するため、各因子ごとに折半法によりスピアマン・ブラウンの信頼度係数を算出した(表2)。

次に各因子の内容について検討した。因子1は、「意欲が湧かない」「無気力である」など自己の活動を起こすことが出来ないということを表す項目と、また、「全てを捨てて、どこかへ逃げたくなる」「自分は、あきらめやすい性格だ」など、コミットしない回避的な態度をあらわす項目が、同一の因子に大きな負荷を示したために、16項目からなる因子となった。それらを一括して、「無気力・逃避因子」とした。因子2は、強迫性に関わる「徹底的にやらないと気が済まない」などの項目が含まれており、それを「強迫性因子」とした。因子3は、仕事や勉強など本業に対してコミットしようとする姿勢を表す項目が多く含まれているが、「たいていのことは、適当に済ませておけばよい」という物事にコミットしない態度を表す項目が高いマイナスの因子負荷量を有していたため、それを逆転項目として採用した。因子3については、「コミットメント因子」とした。因子4は、意図的にコミットしない態度を表す項目に負荷していることから「非コミットメント因子」とした。各因子得点の分布は、全て正規分布に近いものであった。

因子1にあたる、無気力・逃避因子は、「意欲が湧かない」など、自己の活動を起こすことのできなさを表す次元と、「逃げ出したい」「諦めやすい」など逃避的でコミットしないことを表す次元という、もともと筆者が異なる次元の項目と考えていたものが1つの因子の中に括られた。そのため、無気力・逃避因子に16項目が含まれ、意識的にコミットせずに、距離を取ろうとする態度の次元を表す非コミットメント因子の項目は4項目のみになった。無気力・逃避因子は、自己のコントロールに感じる困難さという次元のみならず、様々なレベルの広い不適応感が関わっていると考えられ、概念的にやや不明瞭な感がある。ただし、これは、逃避・退却的なあり方が、

表1 執着スタイル質問紙の因子分析 (varimax 回転後)

N=530

(*)は逆転項目

質 問 項 目	因子負荷量				
	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
29 仕事や勉強をする意欲が湧きにくい	.726	-.086	-.108	.146	.619
33 無気力になることが多い	.721	.109	-.057	.108	.600
36 自分の仕事や勉強のことになるとおっくうになる	.709	-.051	-.087	.132	.561
22 やらなければならないことなのに、やる気がでなくなる	.661	-.036	-.061	-.002	.498
15 何をするのも面倒くさくなる	.657	.037	-.173	.012	.528
4 仕事や勉強などを一生懸命にできない	.590	-.224	-.158	.077	.521
44 必死になって、物事に取り組むことができない	.552	-.264	-.070	.267	.502
43 追いつめられるまで、やる気が起きないことが多い	.533	-.123	.005	-.104	.389
18 自分のしていることが、むなしいことのように思える	.531	.234	-.063	.241	.521
12 自分のやっている仕事や勉強の意味が分からない	.521	.071	-.091	.026	.363
49 全てを捨てて、どこかへ逃げたくなる	.508	.127	-.017	-.011	.434
25 自分が何者なのか分からなくなることもある	.507	.159	.031	-.000	.368
7 たいていのことは自分の思うようにいかないものだ	.493	.229	.007	.197	.456
46 さっさと行動するのが苦手である	.461	.019	-.071	.041	.347
45 自分はいきりやうい性格だ	.444	-.263	-.109	.284	.390
2 まじめに努力しても仕方がないことが多い	.405	.163	-.178	.197	.396
6 物事を徹底的にやらないと気がすまなくなる	-.055	.713	.088	-.203	.584
16 いったん物事をやりはじめると、中途半端にできない	-.138	.631	.219	-.110	.536
32 細かいことが、いちいち気になってしまう	.213	.616	.118	.104	.494
42 自分は完璧主義者であると思う	.036	.560	.149	-.046	.424
38 一つのことを、長い間気になる	.259	.479	.157	-.026	.428
35 ついつい頑張りすぎて疲れ切ってしまう	.056	.465	.198	-.190	.349
34 きちようめんで、整理するのが好きだ	-.076	.434	.070	.124	.307
9 適当にごまかすことができない	-.057	.412	.278	.065	.366
21 自分のやることが、思い通りにならないと我慢できない	.220	.380	.026	-.038	.321
30 どんな時でも、自分の役割をきちんと果たしたい	-.181	.131	.758	.043	.579
40 どんな仕事であっても、きちんとやりとげたい	.046	.050	.707	.029	.501
48 何に対しても、一生懸命に取り組みたい	-.097	.186	.560	-.271	.434
11 仕事などをさぼったり、ずばらにすることはきらいだ	-.189	.298	.525	.103	.455
14 やらなければならないことは、まじめにやる	-.288	.284	.502	.136	.475
10 自分の責任を強く感じてしまう	.033	.376	.473	.009	.407
47 たいていのことは、適当に済ませておけばよい (*)	.299	.225	-.426	.220	.447
50 自分で決めたことには、絶対に責任をもつ	-.312	.187	.410	-.059	.378
41 仕事などを頼まれると、何でも引き受けてしまう	.078	.080	.372	-.172	.265
37 他人との約束は、絶対に守る	-.100	.099	.329	.122	.264
17 失敗しそうなことにエネルギーを使いたくない	.160	.126	-.131	.511	.364
28 物事に、のめりこまないようにしている	.209	-.135	-.010	.444	.305
8 なりふりかまわないやり方は、いやだ	.015	.099	.134	.391	.230
20 ストレスになることは、たいてい避けるようにする	.106	-.002	-.208	.366	.252
寄与率	12.784	7.978	7.005	4.228	

表2 執着スタイル質問紙の各因子の信頼度係数

	信頼度係数
因子1	.912
因子2	.781
因子3	.736
因子4	.510

表3 執着スタイル質問紙の各因子の相関係数

	因子1	因子2	因子3
因子1			
因子2	.100		
因子3	-.324***	.465***	
因子4	.231***	.074	-.010

(***p<.001)

苦悩や問題の本質が浮き彫りになりづらい、曖昧な不適応感をその特徴としている点に対応する結果であると言える。また、4項目となった非コミットメント因子は、項目数の少なさや信頼性の点で改善の余地がある。しかし、コミットメント因子と、強迫性因子については、ほぼ筆者の意図通りのまとまりを持つ項目群となった。

各因子間の相関係数を表3に示す。無気力・逃避因子は、非コミットメント因子と有意な正の相関があり、またコミットメント因子と有意な負の相関が見られた。また、コミットメント因子は、強迫性因子と有意な正の相関が見られた。これらは、執着的な態度に関わる因子と逃避・退却的な態度に関わる因子の対照的な関係を示している。

コミットメント因子と強迫性因子の相関の高さは、それらが執着的な態度の特徴を表すものであるという本稿の基本的な考え方に対応する結果である。また、非コミットメント因子と無気力・逃避因子の相関は、それらが、逃避・退却的な態度に関わる2因子であることに対応する。したがって、それぞれの因子の相違点や共通点を捉えることで、執着することの構造的な理解が深まることが期待される。

コミットメント因子が、非コミットメント因子ではなく、無気力・逃避因子と有意な負の相関を示したことは、意識的にコミットしようとする態度と意識的にコミットしないという態度が互いに排除しあうものではないことを示すものである。コミットしようとする態度は、意欲をなくすなどの点で活動性を失う事態を否定するあり方なのであるが、却って強迫的な過活動や気にしすぎといったことに結びついていると言えよう。

非コミットメント因子は、強迫性因子とも無相関であったため、執着的態度と反対の極にある態度を表すものであるとは言えない結果である。この因子の意味について捉えること、さらにその項目の質と量を充実させることは今後の課題である。

② 執着スタイルの意味についての検討

②の分析については、3枚のT A T図版全てについて、3つの物語が創作された場合のみを分析の対象とし、また、意味内容が全く不明瞭な場合も分析からは除外した。また、執着スタイル質問紙の4つの因子(コミットメント、強迫性、非コミットメント、無気力・逃避)に関して、被調査者を中央値によって高群-低群の2群に分け、各因子と「自分」を登場させるT A T物語との関連を検討した。

被調査者一人につき物語は3つ作られたが、3つの物語のうちで、前述したTAT物語についての指標が全く見られないかどうかで、被調査者を各指標につき、その指標が全く見られなかった場合と一つ以上見られた場合の2群に分けた。以下、TATの各指標ごとに表4を参照しながら分析を進める。

表4 執着スタイルの4因子の高群-低群によるTATの各指標の比較

		コミットメント			強 迫 性			非コミットメント			無気力・逃避		
		H	L	χ^2	H	L	χ^2	H	L	χ^2	H	L	χ^2
図版の人物などへの同一視	なし	48	49	0.19	48	49	0.31	47	50	0.09	44	53	1.30
	あり	23	23		20	23		22	21		24	19	
物語の展開への積極的な関わり	なし	29	40	4.11	27	42	4.85	36	33	0.45	34	35	0.03
	あり	42	29	*	41	30	*	33	38		34	37	
ポジティブな内容の物語	なし	52	60	4.12	56	56	0.46	56	56	0.11	61	51	7.78
	あり	19	9	*	12	16		13	15		7	21	**
ネガティブな内容の物語	なし	51	50	0.01	49	52	0.00	49	52	0.09	44	57	3.64
	あり	20	19		19	20		20	19		24	15	†
「自分」の物語への不参加	なし	57	46	3.34	53	50	1.30	51	52	0.01	49	54	0.16
	あり	14	23	†	15	22		18	19		19	18	

** p<.01 * p<.05 † p<.10

(i) 物語の中で「自分」を図版の絵の人物などに同一視して登場した場合；

「自分」を図版の人物などに同一視させる場合の多くは、自分自身が物語の中で中心的な役割を担っていた。執着スタイルの各因子の高群-低群によって、(i)の指標に関して差が生じるかどうかを χ^2 検定により検討したところ、4つの因子のうちで群間差が認められたものは無かった。

図版の絵を構成する人物や物への同一視は、空想の世界に自分を登場させるのに抵抗の無いあり方であり、執着スタイルとの関連が予想されたが、4因子のいずれとも関連が見られなかった。同一視の対象が図版の絵の中にあるかどうかは、図版の内容と、当人の自己概念の関係という要因が関わっており、それらの要因の介在を統制できなかったものと考えられる。

(ii) 自分が第三者として物語に登場し、展開に積極的な役割を果たす場合；

「自分」が物語の展開に積極的な役割を果たすということの基準として、物語の中で具体的な行為を行う場合（例；バイオリンを弾く、馬に乗る、など）、また図版の登場人物に対して、直接何らかの働きかけをする場合（例；（図版に出て来る人物に対して）話しかける、アドバイスする、一緒に何かをする、など）とした。従って、自分の役割について「自分は（状況を）ただ見ている」「自分は、傍に立っている」とのみ言及されていたり、自分の具体的な行為についての言及がなく物語の展開に関わりの薄い場合は、積極的な役割と見なさなかった。

執着スタイルの4因子に関する高群-低群による、(ii)の指標の群間差について検討した。コミットメント因子と強迫性因子において、いずれも高群の方が、低群よりも、「自分」が積極的な役

割を果たす物語を作る割合が多かった ($\chi^2=4.11$ $df=1$ $p<.05$; $\chi^2=4.85$ $df=1$ $p<.05$)。

執着的な態度に関わるコミットメント因子、強迫性因子の得点の高い人が、ともに空想の物語の中で自分が積極的な役割を果たすという傾向が明らかになった。この結果は、執着することが、願望をなんとかして現実のものにしようとするというスタイルを持つであろうという本稿の考え方を支持するものと思われる。願望を実現するために頑張るという執着的態度は、空想の物語において「自分」が積極的に行為をするというイメージと関わりがあると言える。

一方、執着しない態度に関わる因子である非コミットメント因子や無気力・逃避因子において、上記と逆の傾向が見られることが予想されたが、有意な群間差は認められなかった。

(iii) 自分が物語の中で中心的、積極的な役割を担う場合のうち、物語がポジティブな内容である場合とネガティブな内容である場合；

「自分」が物語の中で中心的、積極的な役割を担う場合のうち、その物語がポジティブな内容であるか、ネガティブな内容であるかということを区別して分析を行った。ポジティブ・ネガティブの評定は、{ポジティブ・ネガティブ・どちらとも言えない}の3カテゴリーのうちのどれに当てはまるかを評定し、ポジティブかネガティブの場合のみを取り上げた。全体の20%にあたる28名分、計84個の物語について筆者の他に心理学専攻の大学院生2名によって評定された結果、79.8%の一致率であった。従って評定に信頼性が見込まれるものとして分析が進められた。

ポジティブ・ネガティブの指標に関して、執着スタイルの4因子の高群-低群による群間差を検討した。ポジティブな内容の物語に関しては、コミットメント因子、無気力・逃避因子において群間差が見られた ($\chi^2=4.12$ $df=1$ $p<.05$; $\chi^2=7.78$ $df=1$ $p<.01$)。コミットメント因子の得点が高いほど、「自分」に空想の物語の中で中心的、積極的な役割を担わせて、しかもそれがポジティブな内容である物語を作る割合が高いことを示す結果である。無気力・逃避因子については、コミットメント因子と逆に、得点が低いほどポジティブな内容の物語を作る割合が高いという結果であった。

このような物語は、「自分」の行為に対する信頼を示していると考えられる。自分の願望を実現させようとする努力が社会適応的に望ましい形で表れているコミットメントの高さは、この自分の行為に対する信頼に基づくものであると言えよう。そして、自分の行為に対する信頼は、無気力・逃避的な態度の否定にも関わっており、適応感を持つためには必要なことであるが、程度が過ぎれば躁的に無気力・逃避的な心性を否定することにも繋がるのであろうと思われる。

ネガティブな内容の物語に関しては、無気力・逃避因子において10%水準で群間差の傾向が見られた ($\chi^2=3.64$ $df=1$ $p<.10$)。無気力・逃避因子得点が高いほど、「自分」が空想の物語で中心的、積極的役割を果たす物語のうち、ネガティブな内容のものを作る割合が高いことを示す結果である。空想の物語の中で自分が大切な役割を担っていても、ネガティブな意味を込められていたり、ネガティブな結果をもたらすのであるならば、無力感を抱くであろうし、無気力・逃避因子との関連は、予想されるものである。しかし、コミットメント因子をはじめ、他の因子において群間差は全く見られなかったため、ネガティブな内容の物語が必ずしも不適応感を意味するものではないと言える。つまり、ネガティブな内容であっても、調査の場でそれを表現する余裕があるということの方が重要な意味を持っているとも考えられる。

「自分」が物語で中心的、積極的な役割を果たすもので、ポジティブな内容と、ネガティブな内容を区別したところ、特にポジティブな内容の場合に、執着スタイルとの関連が顕著に示された。

(iv) 図版から物語を作るが、「自分」を登場させない場合；

それぞれの図版を見て、絵の中の人物などについての物語を作るが、「自分を登場させるように物語を作ってください」という教示にも関わらず、「自分」について全く言及しないまま、物語を展開させる場合がかなり見られた。この指標に関して、執着スタイルの各因子の高群-低群による群間差を検討した。結果は、コミットメント因子において、10%水準で群間差の傾向が見られ ($\chi^2=3.34$ $df=1$ $p<.10$)、物語に自分が登場しない場合が、低群においてより多いというものであった。この結果は、自分が物語の中で中心的、積極的な役割を果たす場合の関連の仕方に対応するものである。自分を物語に登場させないということは空想と現実を分離させて一緒にしないことであるため、非コミットメント因子や、無気力・逃避因子との関連も予想されたが、コミットメント因子以外については、関連は見られなかった。

まとめと今後の課題

「自分」を登場させるTAT物語について、i, ii, iii, ivの分析を行った結果から次のように言える。つまり、コミットメント因子と強迫性因子は、「自分」を積極的に物語の展開に関わらせるといふ点で共通しているが、コミットメント因子の高い人は、その物語がポジティブな内容である場合が多く、この点で強迫性因子との違いが明らかになった。執着的態度は願望と現実を一致させようとする態度であるため、TAT物語において、現実の自分が空想の物語に登場してしかも積極的な役割を果たすというイメージと関わっている。さらに執着のポジティブな側面であるコミットメントの高さは、願望が現実と一致することにポジティブな意味づけをしていることであると言える。一方の強迫性は、願望と現実を一致させようとするものの、そのことにポジティブな意味を感じているとは言えない。つまり、両者を一致させること自体が目的となってしまう、その感情的な価値を見失うことになると考えられる。このことが執着的態度のネガティブな側面を表している。

逃避・退却的態度に関わる無気力・逃避因子は、ポジティブ・ネガティブという物語の情緒的な内容とのみ関わることも特徴的であった。しかし、非コミットメント因子は、上記の分析において、TAT物語の指標との関連が全く見られなかった。非コミットメント因子は、日常生活において、コミットしないという意識的な態度を取りがちであるということを表すものであるが、TAT物語に自分を登場させるという課題においても、コミットしないという態度を表すとは限らないものと考えられる。また、無気力・逃避因子の場合も、ポジティブ・ネガティブという物語の内容との関連はあったが、物語の中における「自分」の登場のさせ方との関連は見られなかった。従って、統計的分析においては非コミットメント因子や、無気力・逃避因子が、空想の物語の中で自分が登場し、活躍することに抵抗があるだろうという筆者の仮説は支持されなかった。逃避・退却的態度に関しては願望および現実イメージのあり方という本質的なところから捉え

切れなかったように思われる。

本稿では、逃避・退却的態度を執着の態度と対照的なものとして考えたが、予想と異なりTAT物語の分析においては対照的な結果が得られなかった。執着の態度は願望と現実の折り合いの付け方という点において問題が収斂されやすいのだが、逃避・退却的態度が顕著である場合は、問題の焦点が定まりにくいと考えられる。後者については、気分や感情状態といった面を第一に取り上げる必要があるのかもしれない。また、特に意識的にコミットメントを避けるという非コミットメントの次元は、様々な要因が錯綜して生じている可能性がある。従って、今後の課題としては、執着の態度と逃避・退却的態度を対照させる一方で、それぞれを異なったパラダイムから理解を深めるという方向性が必要であろうと思われる。

引用文献

- Freud, S. 1909 Bemerkungen uber einen Fall von Zwangsneurose. (小此木啓吾訳 1983「強迫神経症の一症例に関する考察」フロイト著作集9 人文書院)
- Hartman, A. A. 1970 A basic TAT set. *Journal of Technique and personality assessment*, 34, 391-396.
- 平沢一 1966 軽症うつ病の臨床と予後 医学書院
- 広瀬徹也 1977 「逃避型抑うつ」について 宮本忠雄(編)躁うつ病の精神病理2所収 弘文堂 Pp. 61-86.
- 広瀬徹也 1986 抑うつ症候群 金剛出版
- 笠原嘉 1976 うつ病の病前性格について 笠原嘉(編)躁うつ病の精神病理1所収 弘文堂 Pp. 1-29.
- 笠原嘉 1978 退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの登場 中井久夫, 他(編)思春期の精神病理と治療所収 岩崎学術出版 Pp. 287-319.
- 笠原嘉・木村敏 1975 うつ状態の臨床的分類に関する研究 精神神経学雑誌, 77, 715-735.
- 酒井克允 1987 うつ病者の理想と行為の全能 笠原嘉(編)躁うつ病の精神病理5所収 弘文堂 Pp. 171-197.
- Salzman, L. 1968 The obsessive personality -Origin, dynamics and therapy-Jason Aronson. (成田義弘・笠原嘉訳 1985 強迫パーソナリティ みすず書房)
- 佐藤哲哉 1986 逃避型抑うつおよび退却神経症の精神病理と発達史 — 内因性単極性うつ病との比較を通して 臨床精神病理, 7, 147-146.
- 佐藤哲哉 1987 逃避型抑うつおよび退却神経症の精神病理(その2) — 病前性格の発達と成人の発達課題との関連 — 笠原嘉(編)躁うつ病の精神病理5所収 弘文堂 Pp. 55-86.
- 下田光造 1941 躁うつ病の病前性格について 精神神経学雑誌, 45, 101-102.
- Tellenbach, H. 1974 Melancholie -Problemgeschichte Endogenitat Typologie Pathogenese Klinik-. Springer Verlag. (木村敏訳 1978 「メランコリー」 みすず書房)
- Winnicott, D. W. 1971 Playing and reality. Tavistock. (橋本雅雄訳 1979 「遊ぶことと現実」 岩崎学術出版社)

(博士後期課程1回生, 臨床人格心理学講座)